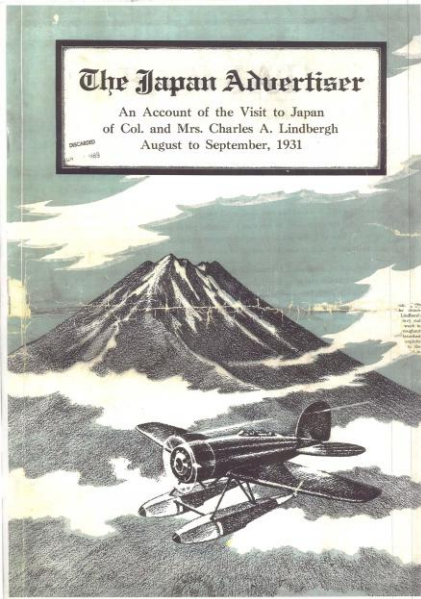




Vol.3

はじめに

《三好企画の web サイトに掲載されている文は全て著作権法により保護されます。日本語訳の著作権は三好企画が保有しています。掲載されている文の閲覧と印刷には制限なく、研究にご利用ください。ただし、全文をコピーして流用すること、改ざんすることはお断りします。

これは 1931 年の日本社会、世界の航空機、航路についての貴重な記録です。論文の部分引用にあたっては、「出典」として下記をご掲載ください。》

『ジャパン・アドヴァタイザー』The Japan Advertiser 1931 年 10 月 10 日、ジャパン・アドヴァタイザー発行 日本語訳・三好企画 2025 年

アメリカで出版されたアン・モロウ・リンドバーグ著『海からの贈り物』（1955 年）の 70 年目の記念として、まずは一部を公開します。

凡例

〔 〕 及び＊のある部分は、訳註である。
原文は英語なので、漢字表記が不明のものはカタカナにした。

原版はタブロイド判 32 ページ、報道内容が重なった部分があるので一部を割愛した。

翻訳協力 順不同、敬称略

リーブ・リンドバーグ 兼子 奈緒美 中川 経子 浅野 正弘

1931年8月29日

8月29日、歓迎行事ハイライト

——日米協会はリンドバーグ夫妻のために メイプルクラブで和食晚餐会を催す——
さらに続く公式訪問

——アメリカンクラブ東京支部は夫妻を終身会員に迎える——

東京市長は午餐会を催し、長岡外史中將は内輪の茶会を催す
——大佐に敬意を表する歌が歌われる——

8月29日、前日の息詰まるような暑さのあとに訪れた涼しい天気のおかげで、リンドバーグ大佐と夫人は目白押しの歓迎行事と公式訪問を順調にこなすことができた。午前中は再び公式訪問にあてられ、リンドバーグ大佐は夫人と一緒に、農林省、カナダ公使館、中国公使館を訪れた。東京アメリカンクラブで終身会員の称号を受ける式典に参加したあとは、夫妻は永田東京市長が主催する午餐会に出席した。

午後、リンドバーグ大佐と夫人は長岡外史中將が催した内輪の茶会に招かれ、一日の締めくくりは日米協会がメイプルクラブで開催した豪華な晚餐会だった。

午前9時30分、リンドバーグ大佐と夫人はまず最初に麹町永田町の官邸に町田忠治農林大臣を訪ねた。リンドバーグ夫妻の飛行機が計吐夷島近海で不時着した時、救援のためにシムシル丸を派遣した責任者だった長瀬貞一水産局長が会見の際に同席し、リンドバーグ大佐と夫人に紹介された。

リンドバーグ大佐は、折りよく得られたシムシル丸の援助に感謝の意を表した。飛行機の錨のロープが岩に擦り切れてしまった直後に船がやって来て、風と波のなすがままに漂う危険にさらされたところを、農林省の汽船に飛行機をしっかりと結びつけることができた、当時の模様を語った。

大臣は会話の中でリンドバーグ大佐の手腕について触れ、「大佐はシムシル丸の援助がなくともいかなる困難も切り抜けることが出来たと確信しているが、船が大佐の役に立てて嬉しい」と述べた。またリンドバーグ大佐は、事故の現場に船を派遣した長瀬氏の迅速な対応に感謝した。

リンドバーグ大佐と夫人は、午前中はその後、10時に東京のカナダ公使館を公式訪問し、臨時大使ケネス・カークウッド氏の出迎えを受けた。リンドバーグ大佐と夫人に同行したのはネビル氏と克蘭フォード中尉で、歓迎の場に居合わせたのはカナダ公使館商務官リチャード・グルー氏およびグルー夫人、商務補佐官キース・ドラール氏、英国大使館秘書官A・ギヤスコイン氏、ハーバート・マーラーカナダ首相夫人の私設秘書、E・コールズ嬢、その他の人々だった。

カナダ公使館訪問の目的は、カナダの領土上空を飛行中にカナダ政府より受けた援助に対する感謝の意を伝えるためだった。リンドバーグ大佐はカナダ公使館高官カークウッド氏としばらく歓談した。カークウッド氏は英国空軍およびカナダ空軍の元隊員であり、航空関係の事情に通じていた。一方、リンドバーグ大佐は祖先に何人かのカナダ人がいたので、カナダに特別な関心を持っていたのだ。

アメリカンクラブ会員になる

昨日の11時30分、築地の滞在先でリンドバーグ夫妻にとって、もっとも喜ばしい行事のひとつが行われた。アメリカンクラブの代表者が訪れて、夫妻をクラブの会員に加えたのである。クラブを代表してジョン・スナイダー氏とH・C・ケンダル氏が訪れ、リンドバーグ夫人を準終身会員に、リンドバーグ大佐を名誉終身会員としてクラブに迎え入れた。文字が刻まれた銀のプレートがひとつずつ夫妻に贈呈され、大佐のプレートには「東京アメリカンクラブ 名誉終身会員チャールズ・A・リンドバーグ大佐 1931年8月」と銘が刻まれており、夫人のプレートにも同様の銘が刻まれていたが、「準終身会員」という部分だけが違っていた。

現在の同クラブの会館は狭く、大掛かりな歓迎会と贈呈式を行うことが出来ないのも、式典を略式の物にすることにしたのでアメリカンクラブの代表者たちは述べた。贈呈式は10分ほどで終わったが、式の最後にリンドバーグ大佐は、この会員資格は日本で受けた最も嬉しい贈り物のひとつであると語った。またリンドバーグ夫妻は、「日本に来たのは、ただ平穏な時を過ごすためなのだ」とケンダル氏とライフスナイダー氏に語った。

アメリカンクラブの会員資格授与式の後、リンドバーグ大佐と夫人は清澄庭園を訪れた。永田秀次郎東京市長主催による午餐会のもてなしに主賓として招かれたのである。アメリカ大使館の職員が大勢夫妻に同行し、正午少し前、一行の到着を永田市長が出迎えた。リンドバーグ大佐は金曜日に市庁舎を公式訪問した時、既に永田市長に会っていたので、夫人を市長に紹介した。リンドバーグ夫人は魅力的な微笑を浮かべながら市長と握手した。

永田市長は行事の合間に新しい庭園を案内してまわり、日本庭園の美しさを夫妻に見せてまわった。一行は大きな池の飛び石の上を歩き、餌を投げ入れると鯉や金魚が水面に集まって来た。

正式な行事は、庭園内の大正記念館の会場で、中央テーブルに他の賓客とともに夫妻が着席してから始まった。同席していたのは永田市長、アメリカ大使、ジェイムズ・ラッセル夫人、エドウィン・ネビル夫妻、トーマス・克蘭フォード・ジュニア中尉夫妻、ルドルフ・B・トイスラー氏、その他の人々である。永田夫人は病気のために出席することができなかった。

「空の王者」歌われる

最初に永田市長が短いスピーチを行い、リンドバーグ大佐がそれに答えた。そのあと、アメリカから日本に戻ったばかりのソプラノ歌手・井上キョウコ嬢が、リンドバーグ大佐に敬意を表して堀内敬三氏により作られた『空の王者』という題名の日本語の歌を披露した。リンドバーグ大佐も夫人も、歌を聞きたいへん喜んだ様子で、拍手で感謝の気持ちを表した。

公式行事の最後に、招待客は庭園内にある料亭に移動し、そこでは吸い物、魚料理などのご馳走が供された。日本に来て間もないことを考慮に入ると、リンドバーグ大佐と夫人はなかなか上手く箸を使っていた。また、見たことのない料理の数々に非常に興味を示しながら、出された食事を楽しんだ様子だった。

食事のあとで一同は大正記念館に戻り、そこでは花柳寿美嬢が舞踊を披露した。花柳嬢は踊りの後でリンドバーグ夫妻に紹介され、踊りに使った扇子と手ぬぐいと羽織を贈呈した。その後、リンドバーグ大佐と夫人は1時少し過ぎにその場を辞した。

長岡外史中將は、夫妻を千駄ヶ谷の自宅に招待して、内輪のお茶会でもてなした。アメリカ大使、永井秀次郎東京市長など、40名ほどが出席した。リンドバーグ夫妻が長岡中將の自宅の門に到着すると、アメリカと日本の国旗を振りながら夫妻に向かって「万歳」と歓声を送る、200名もの児童たちに迎えられた。その後、お茶がふるまわれている間は、子供たちはベランダに面した庭に集まり、その中の少年のひとりが、日本の少女少女がリンドバーグ大佐に抱いている理想を述べた歓迎の辞を朗読した。この朗読に引き続き、美しい刺繍がほどこされたシルクで覆われた箱がリンドバーグ夫人に、ミニチュアの鎧兜一揃いが大佐に贈呈された。その後、子供たちは正面玄関に戻り、招待客を見送るためにそこで待機した。

日本の伝統芸能を楽しんでもらう前に、有名な日本人バリトン歌手・徳山環氏が西条八十作詞による『青空の王者——我等がリンディ』という歌を歌った。ピアノによる伴奏は作曲者の橋本邦彦氏が務めた。松竹所属の女優のひとりである若葉信子嬢は、長唄の伴奏による『蛸』という踊りを披露した。

茶会の最中、長岡中將は日本語でスピーチを行った。アメリカ大使館のアンドウ氏が通訳を務めた。長岡中將は「何年もの間夫妻に会うことを願っていたので、リンドバーグ大佐と夫人に会うことが出来て大変嬉しく思っている」と述べた。また、「むさ苦しいところではあるが、光栄にも自宅で、いささかも形式張ることなく夫妻をもてなすことができ、喜ばしく思っている」とのことであった。長岡中將はリンドバーグ夫人に、淡い色合いのブルーの絹地にトンボの模様が描かれた夏物の着物と帯を贈り、茶会の間、夫人はその着物をまわっていた。

長岡中將は、リンドバーグ大佐と亡くなった浜口雄幸元首相の氣質が似かよっている点を指摘した。中將はまた、ほぼ同時刻にアメリカ人飛行士であるリンドバーグ大佐が日本に到着し、元「ライオン宰相」がこの世を去ったことを語った。

長岡中將は、リンドバーグ大佐と故・浜口氏が似かよっている点は人柄と、またそれぞれの国の国民に人気があったことであり、それは兩人ともに「不言実行の士だからである」ということが分かったそうだ。

また、長岡中將は次のように述べた。「リンドバーグ大佐がこの世で最も偉大な飛行家であるなどと、おこがましい事を申し上げるつもりはありません。世界には、飛行技術において同等の力量を持つ者がほかにもいることでしょう。しかし、リンドバーグ大佐が初めてアメリカ合衆国からヨーロッパ大陸まで無着陸飛行を行ったために、世界的な名声を得たことはまぎれもない事実です。また、それが偉大な功績であり、世界中で、とりわけその進歩に大きな関心が寄せられている事を考えますと、飛行技術の将来の発展に大いに寄与するものであることは認めざるを得ないでしょう。」

この4年間、リンドバーグ大佐が絶大な人気を保ち、アメリカ人の尊敬の対象であり続けた源はなんでしょうか？ わたしが見るところでは、大佐の人気は断固とした性質と辛抱強さ、つまり不言実行の士であることに負うところが大きいと思われます。日本ばかりでなくアメリカでもこのような氣質は敬服に値するのです。」

「亡くなられた浜口氏もまた、このように優れた見識と断固とした決意という性質の傑出した例であり、また、非常に寡黙でありながらも力強い個性の持ち主として有名で、それゆえ社交嫌いでありながら人気がありました。大佐と浜口氏は年齢も経歴も異なっていますが、ものの考え方と氣質は非常に似かよっています。」

「この二人の相似はまた、親に対する愛情の深さという点にも及んでいます。二人の相違点は、ひとりだけがアメリカ人の飛行家であり、もうひとりが日本人の政治家というだけであり、また年齢が違うだけなのです。」

その晩、来日したリンドバーグ夫妻に敬意を表して日米協会の会員210名が集まった。その晩のスピーチは貴族院議長および日米協会会長・徳川公爵によって行われた。公爵はこのたびの顕著な功績に対し、リンドバーグ大佐と夫人に祝辞を述べ、その功績が日米関係に与える好ましい影響について述べた。

その晩の行事は6時20分、メイプルクラブ1階で来賓の出迎えから始まった。日米協会の会員とその同伴者達は、リンドバーグ大佐と夫人、そして随行の一行がクラブに顔を見せる前に集まれるよう、早めに来るようにと伝えられていた。行事の手配は時計のように正確だった。その晩の主賓が到着するやいなや、盛大な行事の進行が始まった。リンドバーグ大

佐と夫人は微笑みながら崇拜者のひとりひとりと握手を交わした。主賓を迎える列には、アメリカ大使、徳川公爵、ジェイムズ・F・ラッセル夫人の姿があった。迎えの列を通り過ぎると、階段を昇ってクラブの大宴会場に向かい、着席した。

宴会場には、部屋の幅いっぱい長座卓が4列に並べられていた。2列は部屋の中心に沿って、もう2列は両側に沿って並べられている。床の間の前には、主賓に加えて、F・コバヤシ海軍大将、杉山元夫人、牛塚東京府知事、長岡外史陸軍中將、永井松三夫人、J・ワタナベ陸軍大将、長岡外史夫人、永井松三氏、ジェイムズ・Fラッセル夫人、アメリカ大使、徳川公爵、小泉逋信大臣が座っていた。床の間の前を占めている一団の隣り、部屋の上手には陸軍次官・杉山元中將、白鳥敏夫夫人、コガワ・セイイチ氏、ウィリス・J・アボット夫人、白鳥敏夫氏、ウィリス・J・アボット氏、橋本圭三郎氏、岸倉松夫人、S岡本夫人、伊勢谷次郎氏、A・E・ホールデン氏、S岡本氏、トーマス・アッシュ氏が座った。

この会の雰囲気はきわめてカジュアルで、招待客は一様に夏服を着ていた。リンドバーグ大佐は熱帯向きの麻のスーツ姿で、リンドバーグ夫人は凝ったデザインの、魅力的な白とブルーのシフォンのドレスを纏っていた。

各招待客が宴会場の名前が記された自分の席に着くと、座布団の前の低い食卓の上には、すでに日本料理の皿が並べられていた。晚餐は最初は、名高いメイプルクラブの女性接客係が、次に芸者が給仕の係を務めた。料理は正真正銘の日本料理で、前付け、ヌマガメの汁、鴨の照り焼、鶏肉の煮もの、鮎の塩焼き、海老の天ぷら、ご飯、そして果物が出された。リンドバーグ大佐は芸者達の注目の的で、その晩、床の間の前は一度ならず混雑した。

徳川公爵 二人の飛行士を歓迎

徳川公爵は次の様なスピーチを行った。

「4年前、無名の若者がニューヨーク・パリ間で画期的な飛行を成し遂げて、世界を驚かせました。そして、謙虚で飾らない態度と気骨の強さで、同国人ばかりでなく世界中の人々の心をつかみました。今宵、リンドバーグ大佐と夫人をお迎えし、抑えきれない喜びの気持ち、とても言葉にはつくせません。」

「リンドバーグ大佐と夫人に、このたびの偉業に対するお祝いを心より申し上げ、またアメリカと日本の間に空路を切り拓くという偉大な貢献に対して感謝致します。」

「また、最も敬愛されているお二人を平和と親善の大使として日本に遣わして下さったアメリカの皆さんに、感謝の気持ちを述べさせていただきます。アメリカが、最も優れた国民を日本に送り出してくれたことを私たちは承知していますので、日本国民は誠実な偽りのない心情でお二人を迎えずにはいられません。リンドバーグ大佐と夫人の訪問は、日本とアメリカの間の発展的な交流、また、更に重要なことですが、両国の人々の間に変わらぬ好意

と個人的な友情という観念を創出するという点で、新しい時代の始まりを象徴するものになることでしょう。」

「リンドバーグ大佐がアメリカ国民に慕われているのは、単に航空上成し遂げた超人的な成功によるものではなく、むしろ、大佐の生き方が若いアメリカ人男性が抱く、最高の理想の典型だからなのです。大佐の大胆さと勇気、飾らない謙虚さと清廉を尊ぶ心、決断力と独立独行の精神、人を惹きつける人格と気骨、これらはすべて日本の武士道が定める伝統的な規範に相通ずる特徴です。」

リンドバーグ夫人を賞賛

「さらにまた、この長い旅を夫とともにし、手助けしたリンドバーグ夫人の技術的造詣の深さと勇気に対して、私たちの胸は敬愛の念でいっぱいです。夫人が見せた若い女性の気高い性質は、日本国民に深い印象を与え、永い間、影響を及ぼさずにはいられないでしょう」

「千島列島で、視界を遮る霧によって引き起こされた、到底克服できないと思われた障害に直面したその時、リンドバーグ大佐と夫人に備わっている真の資質と真価が明らかになりました。お二人は日本の若者に、どのような仕事に関わっていようと、人類の幸福のために利他的な献身を行うという、新たな着想をもたらしたのです。」

「では、皆さん、リンドバーグ大佐と夫人の健康を祝して乾杯をお願い致します。お二人が平和と友愛の発展のために、これからも末長く貢献なさることを願って！」

リンドバーグ大佐、徳川公爵に返礼のスピーチ

リンドバーグ大佐は独特の話し振りで、つぎのように語った。

「日本の皆さんから受けたご親切に、あらためて感謝の気持ちを述べさせていただきます。年月を重ねるにつれて、飛行機で訪れたアメリカ人が日本にいることは珍しくなくなるでしょう。今日の飛行技術の発達は、誰もが普通に飛行機で国から国へと移動するまでには到っていません。距離が何千マイルにも及ぶときは、特にそうです。しかし、現在の状況は、まさに今後の状況を暗示するものと考えなければなりません。現在のところ期待できるのは、空路による日米間の定期的な郵便と旅客の輸送便です。現時点で個人が飛行機でアメリカ、あるいは日本から互いの国に飛ぶことは、過大な要求でしょう。」

「しかし将来、発明と科学の歴史が、過去のように続かないということがない限り、次の世代、あるいはその次の世代のうちに、今日のわたしたちが予測もしなかった機会と発明を手に入れるでしょう。そして何十年もしないうちに、特別なこととは考えずに互いの国に飛行機で行くことが、東洋と西洋の人々にとって、さほど不思議なことではなくなっているだ

ろうという希望を、せめて述べさせていただいても、差し支えないだろうと思っております。ご清聴ありがとうございました。」

ふたつの短いスピーチに引き続き、日米協会の名前で日本訪問の記念品が夫妻に贈呈された。記念品は大きな七宝焼きの花瓶で、輝く深紅色の地に翼を広げて飛ぶ白い鳥の模様がついていた。

食事の後、8時30分に出席者は歓迎の出迎えが行われた1階に再び移動し、そこで長唄の伴奏による日本舞踊が披露された。演目には『橋弁慶』、『娘道成寺』、日本とアメリカの国旗を使って踊る『日米の踊り』が含まれていた。

リンドバーグ大佐と夫人は前の列で、外務次官永井氏と永井夫人、徳川公爵とともに踊りを鑑賞した。永井夫妻はこれらの踊りについて、主賓のリンドバーグ夫妻に説明をした。この後一行は、メイプル・クラブの広大な庭園を散策した。リンドバーグ大佐と夫人は、庭園に出るときに履いた日本の草履に、いささか苦勞して歩いていた。

出席者リスト

昨晚の晩餐会に出席した協会の招待客は、以下の人々である。

逓信大臣・小泉又二郎氏、ワタナベ・ジョウタロウ大将、永井松三夫妻、長岡外史中将夫妻、牛塚虎太郎府知事、小林躋造海軍中将、逓信次官・大橋八郎氏、陸軍次官・杉山元中将および夫人、S・トガワ夫妻、外務省 白鳥敏夫夫妻、帝国飛行協会副会長・橋本圭三郎氏、岸倉松夫妻、伊勢谷次郎氏、S・岡本夫妻。

キャメロン・フォープス大使、ジェイムズ・S・ラッセル夫人、リンドバーグ大佐、リンドバーグ夫人、ウィリアム・J・アボット夫妻、シアトル日本協会 A・E・ホールデン氏、トーマス・アッシュ氏。

徳川家達公爵、アサプキ・ツネキチ夫妻、アサノ・リョウゾウ氏、K・E・オーレル夫妻、アサイ・タダヒコ氏、D・H・ブレイク・ジュニア夫妻、トーマス・・クランフォード中尉夫妻、団琢磨男爵、W・R・デヴィーン氏、ドイ・ケイイチ氏、D・R・ドゥーリ夫妻、R・F・キング夫妻、ウィリアム・S・ダウド氏、R・L・ダーギン氏、B・W・フライシャー夫妻、J・R・ヤング氏、バートン・クレーン夫妻、クラレンス・デービス氏、ドゥボールト夫妻、ウィルフレッド・フライシャー夫妻、E・W・フレーザー氏、トーマス氏、フクイ・コウイチ夫妻、アーサー・ギャレルズ夫妻、J・R・ギアリー氏、J・C・グールド夫妻、P・W・パーカー夫妻、ドワイト・S・ヘイブズ氏、F・W・ヘックルマン博士夫妻、F・D・ギーリー博士夫妻、A・B・スプロウルズ嬢、M・B・オールドリッジ嬢、ヒラタ・トウジロウ氏、ホリ・イチロウ氏、ホリ嬢、ジェームズ・P・ハウ氏、ハッチンソン氏、エドウィン・

T・イグルハート博士、イノウエ・カツズミ子爵、イノウエ・タダシロウ 子爵、S・アイザックス氏、イワナガ・ユウキチ氏。

A・G・ジラード氏、アーサー・ヨーアンセン氏、樺山愛輔伯爵、カミヤ・タダオ氏、カシワギ・ヒデシゲ氏、カワカミ・ナオノスケ夫妻、キシ・セイイチ博士、コバヤシ・マサナオ氏、小松隆夫妻、クラチ・マサオ氏、クロカワ・シンジロウ氏、H・B・マッケンジー夫妻、S・キングシェリー嬢、A・マックイナリィ氏、D・D・マックレガー夫妻、J・G・マッキロイ中佐夫妻、ミシマ・リョウゾウ氏、ミヤオカ・ツネジロウ氏およびミヤオカ夫人、モリムラ・イチザエモン男爵、R・F・モス氏、ナカガワ・スエキチ氏、ナカマツ・モリオ氏、ナカムラ・フサジロウ氏、エドウィン・ネビル夫妻、オオタニ・ノボル氏、オオクボ・トシタケ侯爵、オタニ・カヘイ氏、オヤマ・ウシジロウ博士、ケネット・F・ポッター氏、O・ブルースマン氏、ジョン・ライフスナイダー氏、ナカイ・トクタロウ氏。

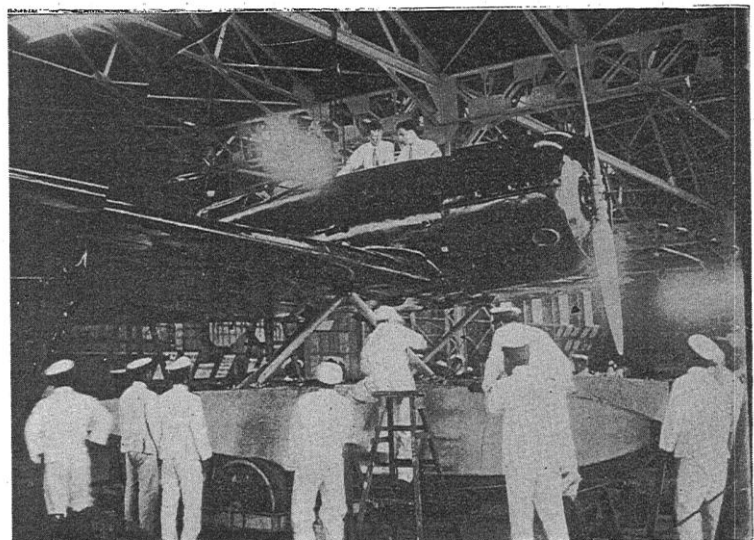
シェバ・ソメタロウ氏、シダチ・テツジロウ氏、シミズ・ヤスジ夫妻、シミズ・ヨノスケ氏、A・J・スタイア・ウォルト夫妻、リオ・D・スタージョン氏、スズキ・ブンシロウ氏、タグチ・イチタ氏、タカキ・ヨシヒロ男爵、テラダ・シロウ博士、R・B・トイスラー博士、フレッド・S・トーマス氏、G・S・トマー氏、W・T・ターナー氏、S・H・ウェンライト博士、L・H・ホワイト夫妻、ヨネヤマ・ウメキチ氏、ズモト・モトサダ氏。

日米協会主催晩餐会の接待実行委員は以下の人々である。

T・アサブキ氏、浅野氏、R・L・ダーギン氏、ウィルフレッド・フライシャー氏、E・W・フレーザー氏、J・R・ギアリー氏、Y・イワナガ氏、樺山愛輔伯爵、小松隆氏、S・クロカワ氏、J・G・マッキロイ中佐、R・F・モス氏、ニトベ博士、T・サカイ氏。委員会はいくつかのグループに分かれて晩餐会の準備の指揮をとった。

【写真説明】

霞ヶ浦で飛行機の整備をするリンドバーグ大佐。



Colonel Lindbergh working on his plane at Kasumigaura

空から見た霞ヶ浦着水

冒険家夫妻が北方から近づいて来ると同時に
ジャパン・アドバタイザー記者は飛行機に乗り
飛行場上空を旋回した

ハミルトン・ポーター 記

リンドバーグ夫妻を空で迎え、夫妻と同じ景色を見てみよう!

日日新聞社の小型飛行機は、回転するプロペラの羽根でスピードを加速し、離陸、霞ヶ浦上空に上昇し、湖の上を真っ直ぐに飛んだ。

晴天とはいえない日だった。内陸部の山々は靄^{もろ}で霞み、飛行の高度が上がるにつれ、海につながる湖の出口がはっきりとは見えない。だが、霞ヶ浦上空の空は青く、雲がひとすじ、ふたすじ浮かんでいるだけだ。眼下の緑色の水面は陽の光を受けて輝き、地形がくっきりと浮かびあがっている。

地上で受けとった最新情報によると、リンドバーグ夫妻は水戸上空に到達し、依然として「北上中」とのことだったが、まだ当分、視界に入ってくる距離ではない。飛行機は旋回した。後方左手には、岸边に沿って建つ格納庫の屋根、広々としたコンクリートの埠頭、そして湖に向かって傾斜している滑走路など、海軍飛行場の施設が整然とした模様を描いている。ところどころに歓迎の人々の姿が見える。飛行機からはひとりひとりは見分けがつかないが、男性が多いようだ。白い服を着ているのは、おそらく海軍の士官と水兵だろう。片側に学校の生徒たちが密集している。赤と白の小さな紙の旗が、かろうじて人垣ぞいに見える。

1本の道路が、港とこの飛行機がつい数分前に離陸した飛行場をつないでいる。なめらかな緑の広大な広がりだ。そこに、しゃがみこんだように点在する陸上機用格納庫が見える。一方の離れた場所に、上空からも大きく見える飛行船用格納庫がその威容を誇っている。ここに、2年前ツェッペリン号が格納された。見渡す限り、これよりも大きな建造物はひとつもない。

湖の形がくっきりと見える。所により広く、また狭く、周囲にその腕を広げている。岸に近いところでは、ざらざらした黄色い泥で覆われた湖底があらわになっている。湖面の下に漂う緑色の水草が、点々と染みのように見える。上陸用栈橋の右手に、海軍の飛行機がかたまって停まっている。出迎えに参加する士官たちを横須賀から運んできたものだ。数隻の小型船が岸边近くに見える。そのひとつは、排気管から一筋の薄青い煙をたなびかせている。湖面には他に何も浮かんでいなかった。

飛行機のプロペラが巻き起こす逆流が、ヘルメットやゴーグル、そして頬を打つ。コックピットから身を乗り出すと、挿すような痛みが走った。パイロットのイレイが振り向いて、笑顔で宇宙を取り込むように片腕を振った。リンドバーグ機が現れる気配はまだない。飛行機はふたたび旋回した。

湖の周囲にある緑が生い茂る一筋の湿地帯が、さらに濃い緑色の、日本有数の肥沃な農地を縁取っている。畑の色合いは様々で、大きさもばらばらだ。湖から飛行場にかけて広がる農地は、くっきりと区切られた小さな長方形をしているが、霞ヶ浦周辺の農地は不規則に曲がりくねって区切られている。「雑草や天候のせいで、歩いていける所で行われているお祭り騒ぎを見に行くことができない」とでもいうように、汗水たらして働いている農夫の姿がポツリポツリと見えるが、つばの広い丸い帽子〔麦わら帽子?〕を被っているので「^{きのこ}」のようで見分けがつかない。

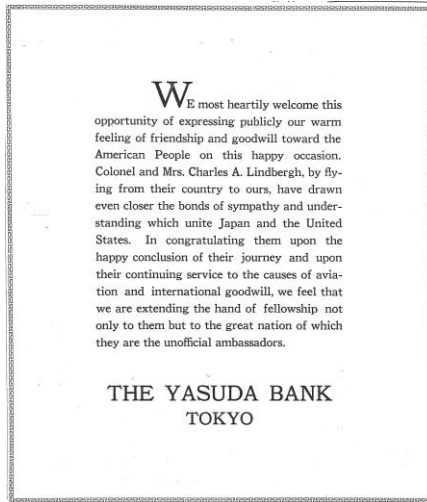
飛行機が土浦から続く、飛行場の向こう側の道路の上空を横切った。遅れてやって来た人々を乗せたカブト虫のような形をした自動車が、土ぼこりをモウモウと巻き上げながら、大急ぎで埠頭に向かっている。兵舎の裏手には白い洗濯物が何列も竿にかかっている。兵舎の手前には、落成式が今朝行われた、完成したばかりのプールがあり、その水面に日の光が反射し、泳いでいる人々が見える。

パイロットのイレイが片手をさっと振り、霞の中を指差した。4つの黒い点が近づいてくる。少しすると、その後方に、さらに3つの点が見えてきた。最初の3機は日本海軍の飛行機で、整然と一団となって近づいてくる。後方の3機は、中の1機の形からすると海軍の水上飛行機だ。その3機に囲まれて、深紅色の翼と銀色のフロートがどんどん大きく見えてきた。もうすぐ、長かった日本への飛行を終えようとしているリンドバーグ夫妻の単葉機だ。

ここからは聞こえないが、地上ではラジオのアナウンサーがマイクに向かって、途切れ途切れに叫んでいる最中だろう。何千何万もの小さな商店で、何千何万ものラジオのスピーカーの前でこのニュースを聞き、日本は心を躍らせているだろう。リンドバーグ機は目的地を目前にしている。2週間にわたり、彼にまつわる話を様々と聞かされてきた男とその妻は、もう到着したのも同然だ。

桟橋にいる群衆もまた、この光景を目にした。小さく見える人の姿が手を振り、水兵がひとりはずれた場所で着水地点を指示するために、赤と白の旗を2本持って立っている。リンドバーグ夫妻の飛行機は付添機から離れ、鉢のような円を描きながら旋回した。どんどん近づきながら飛行機は下降し、水面を滑走し、その後ろに立つ波がしだいに小さくなり、スピードを落とし、歓迎の人々の前でなめらかに停止した。リンドバーグ大佐は、前方のコック

ピットから身軽にフロートに降り立った。次に、リンドバーグ夫人を助け降ろした。到着である。



安田銀行の囲み広告

【写真説明】

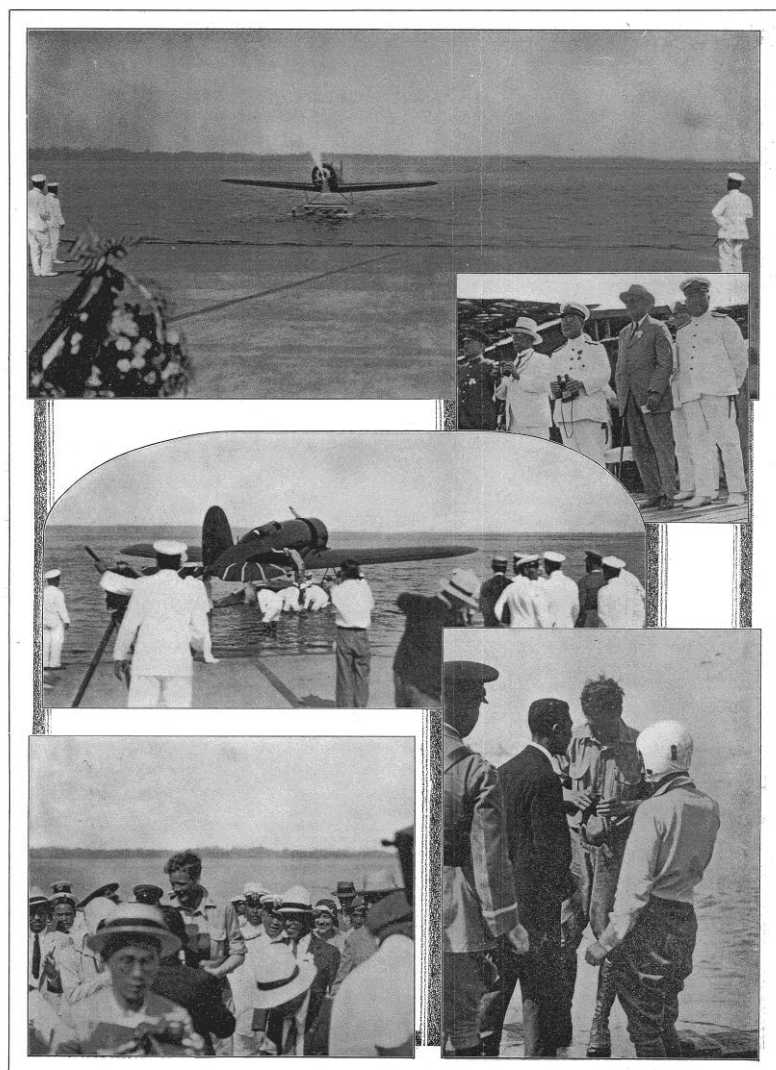
上 霞ヶ浦にて 水上飛行機用
栈橋に接近

中央右 霞ヶ浦でリンドバーグ
夫妻の到着を待ち受ける閣
僚たち。双眼鏡を手にして
いるのが小泉通信大臣と海
軍大臣安保大将

中央左 愛機の陸揚げを監督す
るリンドバーグ大佐

左下 群衆にもまれながらも満
足

右下 霞ヶ浦の格納庫で飛行機
の設置を指揮する



1931年8月30日

東京市 趣向を凝らした公開歓迎会を開催

8月30日、日比谷公園野外音楽堂は群衆で溢れた——その他航空研訪問、内輪の午餐会、アメリカン・ソサエティ主催歓迎会、三井財閥の晚餐会で彩られた一日

8月30日、リンドバーグ大佐夫妻は東京市が日比谷公園で催した公式歓迎会で、東京と日本の熱狂的な歓迎を受けた。公園の野外音楽堂に著名な夫妻が入ってくると、集まった市民は高らかに歓声を送り、多数の日米の国旗を打ち振った。午前中、大佐はひとりで東京帝国大学付属航空研究所を訪れ、その後夫人と一緒にアメリカ大使が開いた午餐会に出席した。午後、リンドバーグ大佐夫妻はアメリカン・ソサエティ東京支部主催のティー・パーティーに主賓として招かれ、夜には、三井男爵夫妻が催した晚餐会に出席した。

午前中、リンドバーグ大佐は新しく目黒に建てられた航空研究所を視察した。クランフォード中尉と霞ヶ浦海軍航空隊の田中少佐が同行し、一行は9時50分に到着した。

研究所所長の斯波忠三郎男爵が満州に行っているため、帝国大学理工学部教授・岩本周平博士が斯波男爵の代理としてリンドバーグ大佐を迎えた。大佐は講堂に案内され、そこで、岩本博士から研究所の活動と歴史について簡単に説明を受けた。岩本博士はリンドバーグ大佐を様々な部門に案内し、和田、橋本、小川の各帝大教授と研究所の職員が詳細にわたって説明をした。訪れた部門は、風洞部、測器部、冶金部、発動機部、航空心理部、工作部など、全部で9ヶ所におよんだ。報道カメラマンは、大佐のあとを研究所中ついてまわった。

ハロルド・ブロムリー大尉が操縦していたバッファレン機が霞ヶ浦飛行場で離陸に失敗した原因を示した構造模型と計算書に、大佐は大いに興味を引かれたようだった。大佐はまた、栖原豊太郎博士が完成させた特超高速度活動写真撮影機にも興味を示した。大佐は研究所で合計2時間ほど過ごし、そこを出たのは11時30分頃だった。

昼には、アメリカ大使とラッセル夫人がアメリカ大使館で内輪の午餐会を開き、リンドバーグ大佐夫妻に敬意を表して、少人数の親しい友人達を招待した。出席者は、アーサー・ギャレルズ米国総領事と夫人、大使館商務官ハレック・バッツ氏と夫人、樺山伯爵、ルドルフ・ボーリング・トイスラー博士夫妻、ミルドレッド・トイスラー嬢、バージニア・トイスラー嬢、そしてルドルフ・トイスラー氏である。

長いテーブルは、うっとりするほど美しくミニチュアの日本庭園で飾り付けられており、岩や草木と茶室の模型を鏡で作った湖面がそのままに映していた。昼食の中でも特に目をひ

いたのは魚料理で、料理人の功績は実に素晴らしく、大きなロブスターを熟練した技で飛行機の形に仕上げ、海を連想させる緑色のゼリーの上にまるごと着水させていた。

午後には、帝国ホテルでアメリカン・ソサエティ東京支部主催の歓迎会が開かれた。招かれたのは全会員とその友人で、歓迎会はホテル1階のメイン・ダイニング・ルームで4時30分から始まった。リンドバーグ大佐夫妻はダイニング・ルームのいちばん奥で、アメリカ大使、ラッセル夫人、アメリカン・ソサエティの役員、その他のアメリカ政府の代表者たちとともに列の中にいた。出迎えの列の先頭にはソサエティ会長のアーサー・ヨーアンセン氏、その次にE・L・ネビル夫妻、そしてアメリカ大使、リンドバーグ大佐夫妻、ジェームズ・ラッセル氏、ギャレルス米国総領事および夫人、米国横浜領事チャールズ・デボールト氏および夫人、アメリカン・ソサエティ事務局長マクファーランド・ヘイル氏夫人が並んでいた。ヘイル氏は部屋の入り口の前で来客を迎え、特別に用意したカードに客のひとりひとりが洩れなく名前を記入するのを確かめていた。このカードは、のちほどリンドバーグ大佐夫妻のカードと一緒にして束ね、会の記録に残すことになっている。

歓迎会には200名以上のアメリカ人が出席した。格式ばった催しではなく、時間も長くかからなかった。部屋の両側に長いテーブルが並べられ、そこでブッフェ形式のお茶が出され、部屋の中央は来客のために空けてあった。

帝国ホテルでの歓迎会が終わった後、リンドバーグ大佐夫妻はロビーで東京市長の出迎えを受けた。市長は夫妻とアメリカ大使を飾り付けられた車まで案内し、一同はその車に乗って街並みを抜け、市民が集まっている日比谷公園の会場へと向かった。

パレードの車

車は長い車体のオープンカーで、ボンネット全体を覆う緑の枝葉と色鮮やかな花飾りが編まれて飾り付けられていた。後部座席の左右のドアにアメリカの国旗がゆったりと掛けられ、車体の正面には、アメリカと日本の国旗が風に翻っていた。車内では、前の座席の背もたれに蘭の花が美しく飾られ、リンドバーグ大佐夫妻と夫妻の間に座るアメリカ大使が真正面に顔を向け、永田市長は運転手とともに前の座席に座っていた。ちょうど太陽が日比谷公園の建物の影に沈むころだったので、車列が帝国ホテルの門を出て、野外音楽堂に向かって通りを走り抜けて行く様子が、ホテルの正面にある浅い池の水面にみごとに映し出された。

リンドバーグ大佐夫妻が乗る車と、それに続くアメリカ大使館の職員が乗る車の列が、群衆で溢れた通りをゆっくりと進むその様子は、いつものように凱進行進の趣を呈していた。車の周りには群衆が押し寄せてはきたが、車の前方と両側を歩くボーイスカウトの一団にしっかりと守られていた。

通りに並んでいる日本人は、あちこちで配られたと思われるアメリカの国旗を、全員が持っていた。夫妻の姿を垣間見る事ができた小さな子供たちの多くは、とても喜んでいる様子だった。ざっくりとした麻のスーツを身につけた無帽の大佐と、青い花模様のワンピースに、つばのない青色の小さな帽子をかぶったリンドバーグ夫人には、見る者を惹きつける魅力が備わっていた。

いささかみすばらしい身なりの日本人女性がひとり、リンドバーグ夫妻の車が日比谷公園に入ってから、その横をずっと長い間ついてきた。かなり若い母親で、幼い子供を二人連れている。ひとりを背負い紐で背中に、もうひとりを胸の前に抱いていた。子供たちはどちらも男の子で、母親はできるだけ大佐の近くに二人を連れて行ってやろうと、必死のようだった。また当の母親は、あこがれの眼差しでリンドバーグ夫人をひたすら見つめ続けていた。リンドバーグ夫人はこの母子の姿にたいへん心を動かされたと見え、親しみを込めて子供たちに手を振ってみせた。

熱狂する群衆

日本の国旗と東京市の紋章が描かれた旗を掲げたボーイスカウトに先導され、リンドバーグ大佐夫妻が野外音楽堂に入場すると、群衆は一斉に立ち上がり、力強く「万歳」と叫び、二人に歓声を浴びせた。興奮した群衆の多くは、椅子の背もたれの上に昇りそうな勢いだった。音楽堂の入り口で、入場者全員に日本とアメリカの国旗が渡されていたので、その場をぎっしりと埋めつくした群衆が激しく打ち振ると、さらに会場が盛り上がった。

リンドバーグ夫妻の一行はようやくステージにたどり着き、市の職員から挨拶を受けて、ステージ左手に用意された席に案内された。一番端にリンドバーグ夫人、隣がリンドバーグ大佐、さらに、アメリカ大使とジェイムズ・F・ラッセル夫人、ネビル夫人の順に並んで着席した。

海軍音楽隊の指揮者が『星条旗よ永遠なれ』の最初の一節を演奏しようと指揮棒を振り上げると、やっと大観衆は静かになった。つづいて日本の国歌『君が代』が演奏された。そのあと、永田市長がステージ中央に歩み出て、リンドバーグ夫妻に深々とお辞儀をしてから、東京市を代表して公式の歓迎の辞を述べ、そのあとで東京市議のカサイ氏によって英語で通訳された。

市民はリンドバーグ夫妻を歓迎

最初に永田市長は、「リンドバーグ大佐夫妻が日本で受けた歓迎は本質的に全日本国民の歓迎である。なぜなら、これまでに訪日した外国人は、政府の公式な客人あるいは専門分野で活躍する技術者として迎えられたのに対し、リンドバーグ夫妻は、この両方の定義に当て

はまるからである」と指摘した。市長はひきつづき、「リンドバーグ大佐はその人柄ゆえに人々に慕われており、大西洋と太平洋の見事な横断飛行は大佐の並外れた人格にふさわしい経歴である」と述べた。また、「リンドバーグ大佐が息子として自分の家族に抱く愛情の深さによって、特に日本人は大佐に敬服している。何故なら、このような気質は日本人にとって不可欠なものと考えられているからである」と語った。永田市長は、「リンドバーグ大佐が競争相手に対して思いやりがあり、勇敢かつ勤勉で、まさにアメリカ人男性の模範と言うべき人物である」と考えている。

市長はリンドバーグ夫人を日本の女性に例え、「優しく思いやりがあり控え目で、性質が非常に似ている」と述べ、「使命を果たさんとする夫を励まし、手助けした」ことでも夫人を誉めた。おわりに永田市長は、「日々の生活の中でリンドバーグ夫妻が示した手本に従えば、日本人は成功することができる」と述べ、最後に夫妻を振り返り、昨日の歓迎会出席の例を述べ、「心ゆくまで日本滞在を楽しむことを願う」と言って締めくくった。

耳を聳するような歓声と拍手の中、リンドバーグ大佐と夫人は立ち上がり、サイトウ・トシコ嬢から美しい花束を受け取った。トシコ嬢は20歳になる東京市助役の令嬢である。大佐は花束を受け取ると夫人に渡した。二人は、気取ることなく落ち着いた様子でにっこりと笑い、群衆の歓呼の声に答えた。

リンドバーグ大佐から東京市長への答辞

リンドバーグ大佐が市長の歓迎の辞に答えるべくステージの中央に進み出ると、カメラマンたちは一斉にフラッシュ・ライトを嵐のように浴びせ始めた。市の職員が制止しても、リンドバーグ大佐が不快感を示してステージの端に行き、商魂たくましいサウンド・トラック・フィルムのカメラマンに「消してください」と頼んでも、目も眩むようなフラッシュはたかれ続けた。群衆の歓声とフラッシュの洪水で、大佐がスピーチを始めるまでに、たっぷり5分間はかかった。大佐のスピーチは以下のようなものだった。

「日本の皆さんから受けた歓待にたいして感謝していることを、このように直接皆さんに伝える機会を持てて嬉しく思います。この数日間、東京と日本で楽しく過ごしてきました。そしてこれから先の、しばしの滞在をととても楽しみにしています。」

「アメリカからの旅は困難なものではありませんでした。一度だけ困難にぶつかりましたが、日本政府の援助のおかげで、それさえ、楽しく快適な経験となりました。」

「アメリカから来るにあたって、私たちは他の人々が楽々と辿れるルートを飛んできたわけではありません。しかし、飛行技術の進歩によって、私たちが日本を訪れた同じルートで皆さんがアメリカを訪れることを期待しています。皆さんの歓迎に感謝し、また、より多くの方々にお会いする事を願っています。」

大使のスピーチ

リンドバーグ大佐がスピーチを終えると、ふたたび拍手喝采が湧きあがった。スピーチが日本語に訳され、観客がスピーチの内容を理解すると、拍手喝采がさらに大きくなった。次に、アメリカ大使がスピーチを行い、東京市民に、真心を込めて熱狂的に歓迎してくれたことに対して感謝の気持ちを述べた。「いくつかの点では、日本とアメリカの人々の考えが異なることもあるかもしれないが、両国民、そして世界の一般の人々にとって、この二人の英雄を歓迎するときには、心はひとつである」と語った。このスピーチも日本語に訳された。

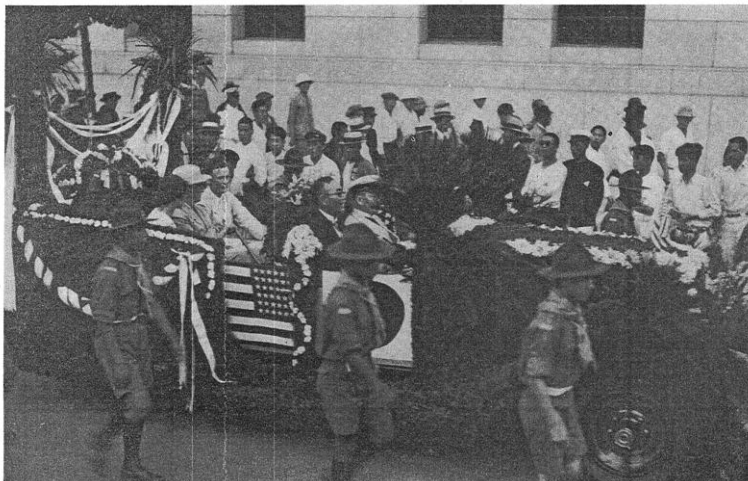
最後に、東京市議会副議長の音頭でリンドバーグ大佐夫妻に熱烈な万歳三唱がおくられ、夫妻は再び苦労しながら群集の中を縫うように退場し、車までもどった。

見事な舞台装置が用意される

日比谷野外音楽堂のステージの上は華やかに飾られ、多くの東京市民がリンドバーグ夫妻を初めて見たときの、そのシーンを効果的に引き立てる額縁のような効果をもたらした。広々とした野外ステージの上方には地球の北極圏を描いた大きな絵が飾られ、そこにはリンドバーグ大佐が日本にやってきた飛行ルートが印されていた。絵には上から照明が当てられ、その両側には、縦長に旗が下げられている。アメリカと日本の国旗だ。舞台背景となっている後方の建物の一番上からは4本の長いロープが放射状に野外音楽堂全体にわたされ、反対側の壁に結び付けてあった。ロープには万国旗が隙間なく下がり、宵の微風がかすかに吹くたびに ひるがえ 翻り、まるで花輪を飾ったようだった。

【写真説明】

飾り付けられたオープンカーで、東京市の歓迎会に出席するため日比谷公園に向かうリンドバーグ夫妻。



Colonel and Mrs. Lindbergh in a decorated automobile on their way to the city's reception in Hibiya Park.



Baron and Baroness Hachiroemon Mitsui were hosts to a brilliant gathering at their home in Akasaka. Many notable persons were present in addition to the chief officers of the many Mitsui companies and the staff of the American Embassy. Those seated are Mrs. James F. Russell, hostess of the American Embassy; Colonel Lindbergh, Mrs. Lindbergh, Baron Mitsui, Baroness Mitsui and the American Ambassador.

【写真説明】

三井八郎衛門男爵と令夫人は赤坂の三井邸で華やかなパーティーを催した。三井財閥各企業の役員とアメリカ大使館関係者ほか、多くの名士が出席した。座っているのは、アメリカ大使館女主人のジェイムズ・F・ラッセル夫人、リンドバーグ大佐、リンドバーグ夫人、三井男爵、三井男爵夫人、アメリカ大使

1931年8月30日

三井男爵、高名な飛行家夫妻をもてなす

晩餐のあと、有名な画家たちが絵画の制作を披露
ーパーティーの記念として招待客に絵が贈られるー
リンドバーグ大佐は大勢のファンにサインする

東京市公式歓迎会の後、リンドバーグ大佐と夫人は、三井八郎衛門男爵夫妻が赤坂の三井邸で催した晩餐会に主賓として招かれた。この邸宅ではこれまでも数多くの名士が集い、パーティーが開かれているが、それがどのような催しであったとしても、8月30日の愉快的パーティーほど楽しく、形式ばらず、趣向を凝らしたものは、ほとんどなかったであろうことは想像にかたい。

三井男爵がリンドバーグ大佐夫妻のために乾杯の音頭をとったが、スピーチはなかった。晩餐に引き続き招待客は、めったにお目にかかれない、面白く、趣向を凝らしたもてなしを受けた。2階の大広間には美しい極彩色の絵がところ狭しと飾られていた。高名な日本人画家4名の手による作品である。4つの机の前に当の画家たちが座り、展示されている作品と、多少似かよった絵を描いているところであった。自分たちの技法と画風を実演によって知ってもらおうという試みであった。招待客はこのパーティーの記念として各々、絵を1枚ずつ選ぶように求められ、来客の多くは、その絵にリンドバーグ大佐のサインを書いてもらった。

招待客は、三井男爵の息子および夫人、三井合名会社の重役、おもな三井系企業の社長とその夫人、アメリカ大使、ジェイムズ・ラッセル夫人、アメリカ大使館領事エドウィン・L・ネビル氏および夫人、アメリカ大使館東京領事アーサー・ギャレルズ氏および夫人、陸軍武官ジェイムズ・G・マッキロイ中佐および夫人、海軍武官イサク・C・ジョンソン大佐、商務官ハレック・A・バッツ氏および夫人、トーマス・克蘭フォード・ジュニア中尉および夫人、三等書記官ウィリアム・ターナー氏、三等書記官ケネス・ファラー・ポッター氏および夫人、R・B・トイスラー博士および夫人、B・W・フライシャー夫妻、J・R・ギアリー夫妻、E・W・フレイザー氏 O・プルースマン夫妻、樺山愛輔伯爵、小松隆氏、クロカワ S 夫妻らだった。

【囲み広告】 三井ハウス

The House of Mitsui

Considers it a great privilege to extend
heartfelt felicitations and all good wishes to

Colonel and Mrs. Charles A. Lindbergh

and to the American people upon the successful
termination of this Goodwill Mission and
upon the Happy Augurs which attend it for
an ever-growing comity and understanding
between the people of America and Japan.

1931年8月30日

公式歓迎行事は首相主催の宴会で幕を閉じる

夫妻はマルガ・フォン・エッツェルドルフと面会
大佐は帝国飛行協会で航空技術について講演を行う
リンドバーグ夫人は買い物に出かける

リンドバーグ大佐夫妻の日本訪問を歓迎するために計画された公式行事は、8月31日、男爵・若槻礼次郎首相が永田町の首相官邸で催した晩餐会でしめくくられた。このパーティーは高級官僚ならびに名士が集う華々しい催しであった。

8月31日のリンドバーグ夫妻の行動は、まずドイツ大使館を訪れて、土曜日にベルリンから飛行機で日本にやって来たドイツの女性飛行家マルガ・フォン・エッツェルドルフ嬢に面会、そしてブロンズ像制作のために採寸、その後、東京會館での午餐会に招待されるというものだった。それから、リンドバーグ大佐夫妻は完成間近のアメリカ大使館を訪れ、首相主催の晩餐会でその日の予定を終えた。

リンドバーグ大佐夫妻はその日の朝、最初にドイツ大使館に行き、フォン・エッツェルドルフ嬢のもとを訪れた。日本にいる間、エッツェルドルフ嬢は大使館に滞在していたからである。

夫妻は大使館に10時に到着し、大使館_____H・コルプ博士とエッツェルドルフ嬢の従兄弟にあたるハッソ・フォン・エッツェルドルフ氏の出迎えを受けた。そして夫妻は、18歳の時から飛行機を操縦している若干22歳の若いドイツ人女性飛行家と面会した。その後、リンドバーグ大佐夫妻は大使館を辞し、大佐は飛行協会のビルで講演を行う予定だった。

不可欠な夜間飛行

日本人航空士官に向けた講演の中で、リンドバーグ大佐は商業飛行のあらゆる側面と将来実現可能な技術の進歩について検討を行った。大佐は、最初に夜間飛行について触れ、商業飛行をスケジュール通りに定期的に運行するためには、夜間飛行は不可欠であると述べた。さらに、夜間の飛行は通常より天候に左右され易い点を指摘した。何故なら、視界を悪化させる濃霧や豪雨の中では、夜間は二重の危険性を負うこととなるからである。大佐は、高性能の無線機と、商業飛行を計画している航路上には、強力な照明を設置する必要性を強調した。

視界が不良、あるいはゼロの曇りの天候の時には、将来、無線が飛行機の着陸の誘導に使われるようになるだろう。それも、無線技術の進歩によって、近い将来実現するだろうとリンドバーグ大佐は予測している。

飛行機を援助する地上の航空灯に関して、大佐はふたつの方法があると述べた。ひとつは常時点灯、もうひとつは点滅灯である。大佐の意見によると、航空上の特殊な要件を考えると、点滅灯の採用が好ましいそうである。大佐はまた、空冷式と水冷式エンジンを題材にとりあげて、両者の長所を比較した。

この講演の中で、飛行機の構造に金属を使用することがとりあげられ、超軽量飛行機を別にすれば、飛行機設計の重要な部分に木材を使用する時代はすでに終わったと述べた。「現在は、金属以外の材質が翼の構造に用いられていることが多いが、飛行機の翼の構造に適した不可欠な性質をもつ新たな金属がこの目的のために開発されることを希望する」と述べた。

さらに大佐は、商業飛行の十分な発展のためには、空中での燃料補給が必要であることに言及し、空中での燃料補給が必然であり、地上で行うよりも遥かに適しており、荒天の海上での補給の際には特に必要であること。将来の技術の進歩により、下方からの給油が可能になると考えられ、給油用飛行機が下方からポンプを用いて飛行機までガソリンやその他の燃料を押し上げる仕組みであるという。

陸上機と水上機では、どちらが日本での運行に適しているかという問題も検討された。もし十分に設備の整った飛行場を設置できれば、陸上着のほうが商業および旅客便に向いている、というのが大佐の意見である。水上機と比較すると、スピードの速さから、陸上機のほうが適しているという説明である。また大佐は、駆動機がひとつだけではなく、より安全な要素ゆえに複基エンジン搭載が望ましいと考えていた。

帝国飛行協会での講演に引き続き、リンドバーグ大佐は夫人と合流して、二人揃って日本空輸会社主催の午餐会に主賓として招かれ、会場の東京會館に向かった。午餐会は個室になっているダイニングルームで行われ、招待客は皆、同じ長テーブルに上座・下座の区別なく着席した。テーブルは日本の伝統的な生け花で見事に飾られており、大佐は簡潔ながらも興味深いスピーチを行った。大佐はこのとき、来日以来はじめて黒っぽいスーツを着ていた。昨日はかなり涼しかったためである。

午餐会のあと、アメリカ大使は大使館の女主人・ジェイムズ・ラッセル夫人とエドウィン・ネビル夫人と共に、リンドバーグ夫妻を大使館、大使官邸、大使館員および領事館職員の宿舎となる新しい完成間近の建物のある霊南坂に案内した。建設責任者である陸軍顧問技師のダドソン・スタンプス大尉が一行を案内して現地を回り、詳細にわたる計画を説明し

た。新しい大使館を訪れた後、一行の婦人達はリンドバーグ夫人に昭和通りの漆器店に買い物に出かけた。

その日リンドバーグ夫人は帝国美術館を訪れた。この訪問は外出に同行したネビル夫人が前もって手配していた。美術館に到着すると、二人は館長の大島義脩氏の出迎えを受け、そのあと、日本美術評論家の第一人者のひとりである原田ジロウ氏が同行して案内係を務めた。原田氏は雪村と雪舟の水墨画をはじめ、著名な芸術家の手による美術館の至宝の一部を二人の婦人にお見せした。

絵画について説明を受けたあと、原田氏が美術館の建物の外にある小さな茶室に二人を案内し、そこで本格的な茶の湯の作法を実演してみせてくれたので、リンドバーグ夫人にとってこの訪問がより喜ばしいものとなった。同夫人は、目にした日本の美術作品の中でも最高のものをすぐさま的確に見分ける審美眼を持ち合わせていたので、彼女に会った日本人はみな感心した。また原田氏は、自分が月並みな礼儀としてリンドバーグ夫人に名作を見せているのではなく、本人のために選びだされた名品の美術的価値を、本当に正しく評価することのできる相手を確かに喜ばせているのだと感じていた。

東京滞在中のリンドバーグ夫人のもうひとつの個人的な遊山は、これもまたネビル夫人が同行した霞町の三原氏の自宅訪問である。三原氏は世界でも有数の貴重な浮世絵版画コレクションを所有していることで知られており、その名作の一部をリンドバーグ夫人に見せることができ、たいへん嬉しく思っていた。そのコレクションは年代別に整理されており、リンドバーグ夫人に作品を見せながら三原氏は日本の版画の発達過程をよく説明することができ、一方、リンドバーグ夫人は熱心に耳を傾けていた。版画を披露する際には、三原氏の令嬢も同席していた。

昨晚の晩餐会で首相・若槻礼次郎男爵を手伝ったのは、若槻トクコ男爵夫人、首相の子息で爵位継承者の若槻ユカク氏、内閣官房長官川崎卓吉氏および夫人、首相の個人秘書橋本・S伯爵および橋本伯爵夫人、もうひとりの秘書である木村氏夫妻、その他数名の内閣事務官とその夫人たちである。

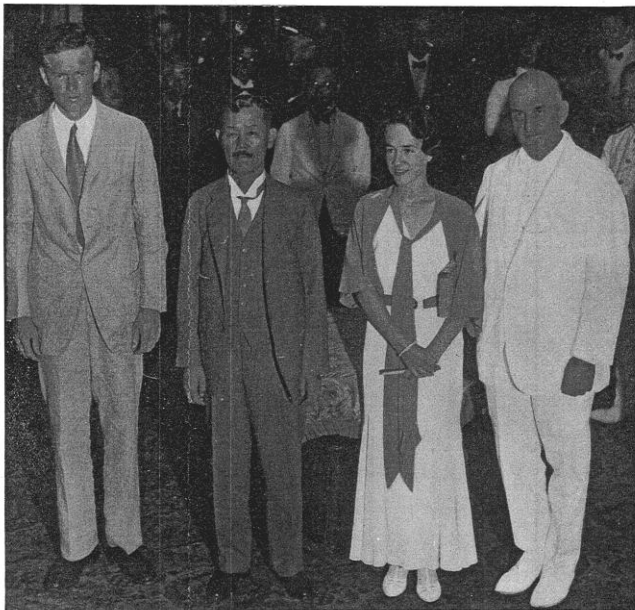
主賓に加えて 50 名ほどの名士とその夫人たちが出席し、なかには以下のような人々がいた。

アメリカ大使、ジェイムズ・ラッセル夫人、エドウィン・L・ネビル夫妻、トーマス・克蘭フォード・ジュニア中尉夫妻、外務大臣・幣原喜重郎男爵夫妻、大蔵大臣・井上準之助氏夫妻、陸軍大臣・南次郎陸軍大将夫妻、海軍大臣・安保清種男爵夫妻、逓信大臣・小泉又次郎氏、前海軍大臣・財部彪海軍大将夫妻、徳川家達公爵夫妻、海軍大佐島津忠重公爵夫妻、前田利為侯爵夫妻、日本銀行総裁土方久徴氏、樺山愛輔伯爵、日本銀行副総裁・深井英

吾氏夫妻、山川タダオ博士夫妻、横浜銀行頭取コダマ・ケイジ夫妻、外務次官・永井松三氏夫妻、大蔵政務次官・田アキラ氏夫妻、大蔵事務次官・河田烈氏夫妻、左近司政三海軍中将、大蔵省ロンドン・パリ・ニューヨーク担当財務官島津寿一氏夫妻、貴族院議員・森賢吾卿、その他の人々である。

【写真説明】

リンドバーグ大佐、首相・若槻礼次郎男爵、リンドバーグ夫人、アメリカ大使。首相主催の公式晩餐会の後で撮った記念写真。



Colonel Lindbergh, Premier Baron Reijiro Wakatsuki, Mrs. Lindbergh and the American Ambassador photographed following the official dinner which the Premier tendered the fliers.



To COLONEL and MRS. LINDBERGH

Greetings.

Birdmen of the world have looked with longing eyes at the Pacific. Some have tried it. Some have circled its northern limits. It remained for you, however, to negotiate that difficult passage with such ease and safety that the possibilities of a commercial air service along your route became instantly apparent. Our bank, long in cordial intercourse with the people of your great country, offers you both its sincere congratulations.

Japan and America have had increasingly cordial relations ever since the day when Commodore Matthew Calbraith Perry reopened the doors of our country to foreign trade. Your visit shows the closeness of the physical link, the few hours which separate us in these days of aviation progress. May the spiritual link grow ever closer!

The Dai-Ichi Ginko, Limited
(The First National Bank)
TOKYO

【囲み広告】

第一銀行



【写真説明】

左上 横浜の神奈川県庁舎屋上にて、風景を指し示す^{やまがた}山県治郎知事。黒っぽい着物姿は山県夫人。

右上 リンドバーグ大佐と握手する^{やまがた}山県知事。

中央左 横浜のフォード社工場にて。4人の後方は支社長補佐S・T・シェーベルイ氏。

中央右 横浜市長・大西氏の官舎にて。左から右へ、米国領事チャールズ・デ・ボールド氏、大西市長、リンドバーグ夫人、リンドバーグ大佐、デ・ボールド夫人、商工会議所会頭井坂孝氏。

左下 大西市長の家の中で。黒っぽい背広姿が市長。

右下 震災記念館にて。